

田中研新聞

第16号

2014年
12月1日発行

2014年12月1日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室 毎月発行
http://canonion.is.konan-u.ac.jp
編集長：大畔 裕 (M2)
編集委員：吉岡一樹 (M1)・岡田航大 (B3)

成果発表会&中間発表会を実施

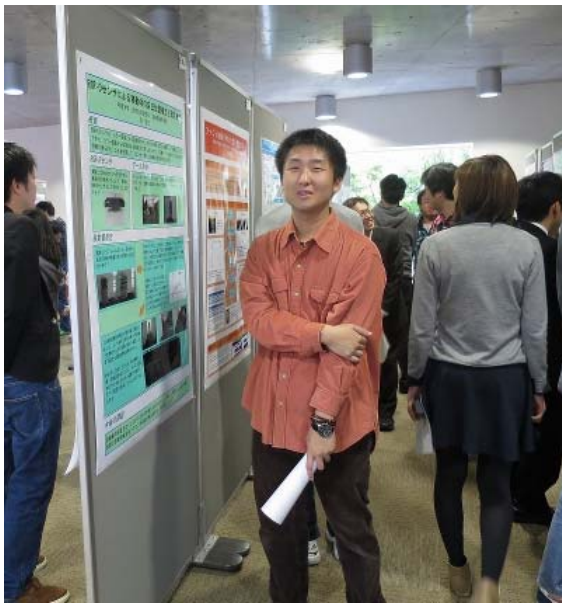
院生の研究成果を発表

大畔 裕

大学院生活が1年半以上経過し、これまで研究してきた内容は二度の学会で発表することができた。ほかの院生も回数は違うが様々な学会で発表している。学外での発表は学会やイベントなど機会は多い。一方、学内の発表は知能情報学専攻の修士の場合だと年に1回の研究成果発表会とM2で行う中間発表会、修論発表会がある。成果発表会はポスター形式、ほかは登壇形式だ。そして、そのうち成果発表会と中間発表会が11月にあり、成果や資料をそれに間に合わせるために、いつも以上に忙しい毎日が続いていて、現在も最後の修論発表会に向けて継続している。



専攻からも多くの人が発表に参加していたので、空き時間を利用して普段見ることのできない他の研究を見ることができ、いい刺激にもなりました。



置推定について発表した。いよいよキャンパス内におけるロボットの自律移動が現実味を帯びてきて、成果としては申し分がない。そう思っているのも予想外の質間でポロボロになるのが学会や発表会だが、私の発表では特に返答を窮する質問は出なかった。しっかりと研究を進め、準備した甲斐はあったというものだ。

最後の発表である修論発表会まであと2ヶ月半。これまでロボットの西校舎で動かしていたが、最近では本校舎に運んで実験することが多くなった。条件が違うので、うまくいかない部分も多いが、自分が作ったシステムは卒業後も使われるはずなので、中途半端に投げ出すような真似はしたくない。これからの時期は寒くなり実験がつかなくなるが、手を抜かず最後までやりきるつもりだ。

郭 哲史

11月、M2にとっては2度目にして研究成果発表の機会が訪れました。研究成果発表会はポスター発表で、田中研究室からは4人の院生が全員参加しました。ポスター発表ということもあり、掲示できる内容には限りがあったため、いかに自分たちの研究の内容を伝えるか試行錯誤しての参加となりました。研究報告会当日は午後から3部構成で行われ、ポスター発表は1部と3部で行われ、私は3部の発表担当になりました。終わりに近くでも若干はななつていたものの、学部内外合わせて数名の人に説明を行いました。質問への回答や、内容への意見を多数もらい、自分にとって有益な発表となりました。また、会場では知能情報学専攻だけでなく他

専攻からも多くの人が発表に参加していたので、空き時間を利用して普段見ることのできない他の研究を見ることができ、いい刺激にもなりました。その後2週間の間を空け、修士研究の中間発表が行われました。研究報告会とは一転して、こちらはスライドショーの発表になったため、また新しく発表用の資料を作る必要があります。しかし、研究報告会のために用意した実験のデータや大まかな基礎説明の部分は共有することができたので、決められた発表時間とすり合わせるために説明や実験データの表記を増やすことで作成が行えました。その際、研究報告会でいただいた意見も反映させることができました。当日は知能情報学専攻のM2が午前中から昼休憩を挟んで午後まで発表を行いました。私は午前の第1クール2番目と、早めの発表となりました。発表までには調整を含みつつ2度ほど練習を行いました。実際の発表は持ち時間を少々超えてしまいました。前日の練習で時間が短くなってしまったことから前半の説明をゆっくりしすぎてしまったので、これは次回に改善すべき点となりました。質疑応答では、ある程度しっかりと回答はできたものの説明不足となっていました。説明不足となつてしまった部分もあるため、論文作成を行いつつ最後の発表に備えたいと思います。

野々口 誠人

今回の研究成果報告会や中間発表会は、学内にどのようなことをしているのかを伝える機会だ。私達のシステムはオープンキャンパスやナレッジキャピタルなどで一般公開していることから、どういったことをしているのかをなんとなく知っている人は多いと思われる。しかし、これまでにシステムを詳細に説明したことがなかったため、より深く内容を知ってもらうことができたのではないかと思います。

研究成果報告会はポスター形式であるため、説明の仕方や会話の流れなどは慣れたものだ。また、「ラジオ体操」、「探点」などタイトルを読めば大方、理解できることから、聞きに来る人は多いようで、学部の先生方ももちろん、他学部の先生や生徒も何人かいた。中間発表では私の発表は昼食前の人が多々集まる時間帯だ。学祭期間であることもあり、注目が集まっていた。

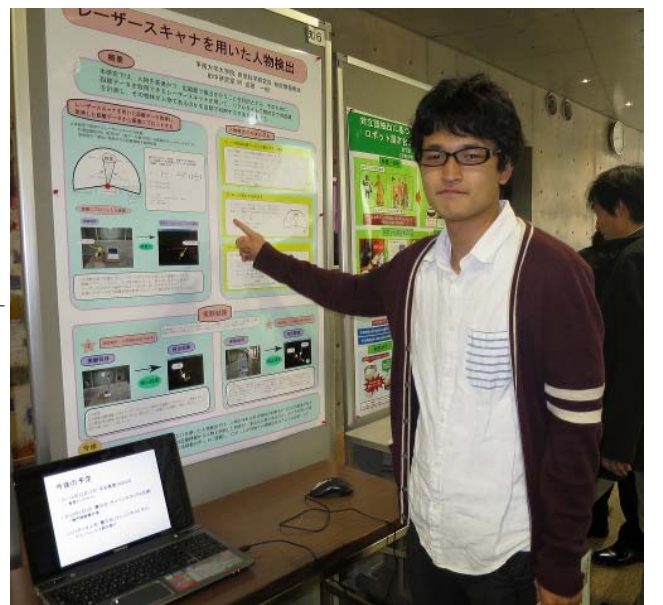
短期間で複数回の発表となりましたが、最後のまとめに向けてとてもいい機会になったと思います。



吉岡 一樹

11月8日に甲南大学校友会館でポスター発表が行われました。今回初めての参加ということもあり、他の

研究室、他の学部がどのような研究を行っているのか興味もあり、楽しみな気持ちで参加させていただきました。



前半の部は自分の発表はありませんでしたので友人の発表を聞きに行きました。まずツイッターのツイートの研究を行っている友人の発表を聞きに行きました。友人の研究の内容はツイートの絵文字から感情抽出を行う研究でした。どのような絵文字ならば喜んでいたり、または悲しんでいるということを自動で判断するシステムの開発を行っているそうです。素人にも理解できる式やアルゴリズムでしたので、その場では理解できましたが、1週間も経過しますと忘れてしまいました。次に物理学科の友人の発表を聞きに行きました。研究を行っている分野が全く違うので研究の内容を詳しく理解できませんでしたが、ハードディスクの基板を作る研究を行っているそうです。

後半の部では私は発表者ではありません。私の発表内容は「レーザーキャナを用いた人物検出」という内容でした。前方190度、半径8メートル以内の範囲内でレーザーキャナから得られた距離情報を用いて、人物を検出するという内容です。最初に物理学科の友人が発表を聞きに来てくれました。友人は情報学の勉強を行っていますので、研究の説明を行うのに苦労しました。例えばプログラムで配列を利用してデータを計算する説明を行う際にまず行列の話をするところから始めて、データ計算する式の説明を行うまでに時間がかかり、友人はあまり理解できていない顔をして帰っていききました。次に知能情報学部の先生が聞きに来てくれました。情報学の先生ということもあり、式やアルゴリズムを理解していただきました。帰り際にロボットに搭載することを問題意識として説明したほうが良いというコメントを頂いたので今後発表の際にはそういった問題意識や背景もしっかりと考えていきたいです。

発表を終えて、素人相手に説明する際にわかりやすい例え話を持つておくこと、先生等への説明の際にはまず初めに背景や問題意識を説明することを反省点として今後にかかしていきたいです。

体操競技で岩佐が好成績

関西大会個人総合5位

11月5日（水）に岡山県総合グラウンド桃太郎アリーナにおいて開催された関西大学生体操新人選手権大会体操競技の部に於いて、本研究室の岩佐幸輝君が個人総合5位、種目別つり輪3位、平行棒2位という快挙を達成した。甲南大学体操競技部の学生が関西大会で入賞するのは17年ぶりである。

岩佐君が体操を始めたのは小学5年生の時だ。当初は器械運動が好きという理由で始め、中学までスポーツクラブ。高校でも体操部がないので、他校の部活に参加して練習していた。今でこそ高度な技もこなすが、高校までは基礎を重点的に練習していて、高度な技を覚えたのは大学に入ったからである。



岩佐君が2人だけしかおらず、彼を含めて3人しかいなかった。なので、先輩たちもすぐに引退し、現在は彼1人なので、部活ではコーチとのマンツーマンの指導が行われることが多い。しかし、時々他大学から練習しに来る学生もいて、互いに切磋琢磨して練習に励むことができた。練習は厳しく大変なものが多かったが、その努力の甲斐があり、とうとう今回の成績に繋がったわけである。

岩佐君は今後の目標として全日本選手権への出場を挙げている。そのためには来年春の西日本学生体操選手権大会で好成績を取る必要があるそうだ。ゼミでの研究や就活などでこれからは忙しいだろうが、悔いの残らない結果を出せることを願っている。（大野裕）

奈良先端で田中教授が講義

深度センサとその応用

11月17日、40年来の友人の、奈良先端科学技術大学院大学の杉本教授からの招待で、講義を行ってきました。外部から講師を呼んで、講演形式で授業を毎回行う科目があるようです。大学院大学ですから、もちろん聞いている人は院生以上の人が約50名が聞いてくれました。私の話は、「深度センサとその応用」ということで、野々口君のラジオ体操評価システムも含めて、最近の私の研究のトピックを中心に行いました。

広い高級感のある階段教室で、障害物検知のデモを見せて、わかりやすさを念頭に講義を行いました。1時間くらいでいいかなと思つて、40枚余のスライドを準備していきませんが、通常の90分授業で、話は20分ほど時間が余りました。しかし、質問がでるわ、7〜8個も質問が



語での質問もありほぼ予定の時間が埋まりました。この質問攻めには軽いカルチャーショックを受けました。講義には、この春甲南大学を卒業し、ここに入学したTさんという方が多かったです。本人の弁では、宿題がものすごく多くて、朝9時半から夜中の2時まで毎日勉強しているとのことでした。皆さんも、まずは、早く起きて机の前に座るといことがとても大切だと思います。講義を終えてから、建物の中をざっと見せてもらいました。ロボット関係の実験室があり、アンドロイドやARMロボットなど、いろいろなロボットがあり、実験中の学生もありました。また、杉本研究室の学生の研究室も見せてもらいました。実験室もゼミ室も広さが十分あって、その点はいずれやましく感じました。交通が大変不便な所でしたが、世界的な研究を維持するためには、学生も教員もあらゆる面でプレッシャーや不便さがあるようこそ出来ることがあるということも改めて実感しました。写真は、左が杉本教授、右が私です。（田中雅博）

わたしの訪れた町

第8回ナイアガラの滝

ナイアガラの滝は、エリ湖からオンタリオ湖に向かって流れる川にある。2002年、署名認識の研究をしていた頃、手書き文字認識に関する学会がオンタリオ湖への出口にある、ナイアガラオンザレイクという小さな町で開かれ、参加したときに滝も訪れた。これがなんとも行きにくい場所であり、デトロイトからアメリカ国内線でバッドファローに飛び、そこからタクシーで1時間ほどのその町に行った。

滝は、我々が認識している滝というものは全く違うもので、幅も水量も、ものすごいものであった。数値的なデータは把握していないが、日本にこれだけの水量がある川は絶対ないと思うほどの圧倒的な水量であり、それが全部滝になって落ちるのだから、それは圧巻としか言いようがない。その滝の落ちるほう（上流）は、歩いてごく近くまで行ける。誤って落ちる人も後を絶たないのではないだろうか。滝壺からは、煙のようにしぶきがもうもうと立ち登っている。日本では絶対にこういう危ないところは言いにくいようになっていいるが、外国ではそうではないので、危機管理が自分でできていない日本人には大変危険なところである。滝つぼは、合羽を来て乗る船もあつたが、一人旅の寂しさでもいうか、こういうところで観光する気持ちにはなかなかならない。ナイアガラオンザレイクは花がいつぱいの綺麗な町だった。オンタリオ湖も

すぐそばにあり、はるか遠くにかすかにトロントの町が見えた。トロントから行くほうが普通のように感じた。地図で見ると、これら2つの町は接近しており、オンタリオ湖の大きさが想像できるような気がした。（田中雅博）

12月17日 野々口君と田中教授が、S I 2 0 1 4 で発表。



今回の12月号の裏面を担当しました田中研3回生の岡田です。〇〇委員という響きが中学生以来で、少し懐かしい気持ちになっています。しかし思えば中学生の時は、3年生の前期まで美化委員一筋で生徒会的美化委員長を務めていて、さあ後記も...と思つたらじやんけんで負けて3年生の後記だけ編集委員になり、卒業アルバムには編集委員として載っていたことを思いだしました。

11月はアルバイトが忙しく、生協牛乳の産地である鳥取県の琴浦町や大山に研修に行ってきました。自然豊かな土地でいろいろ勉強になる話を聞いて、合計9杯ものコーヒーマグや牛乳を飲ませていただき、有意義な時間を過ごしました。ただ、宿泊場所が研修館という小屋で布団なしの毛布のみの雑魚寝という過酷な状況で、帰ってからあの定体調を崩すことになりました。生協の店舗入口で私の撮った写真をスライドショーで映すそうです。もし寄った時に映っていたら是非見てください。あと、行ってから気づきました。が、私牛乳嫌いでした。（岡田航大）

編集後記